リンク元

“若き日のお絵描き”

美術部　中村　輝久

　僕は、子供のころから“お絵描き”が好きだった。

その環境にも恵まれていた。母方の伯父、塚本茂は上野の芸大（現、東京芸術大学）

の油絵科出て、戦前の湘南中学（現、湘南高校）の絵の教師となった。

　それと同時に、鵠沼に居を構え、そこには大きなアトリエを作り、広い庭と池があった。

1,000 坪くらいはあったろうか。藤沢駅から海の方に歩いて１５分くらいだった。

そのころの私の父も伯父のアトリエ教室の仲間の一人で、毎週末、油絵を描いていた。

（残念ながら、現在、ここには従妹たちはいない。今は、ここには何軒もの新しい住宅が建

ちならび、駐車場にもなっていた。）

いまでも、湘南中（高）の卒業生は、当時の雰囲気を覚えていると思う。

　昭和１８年、戦況が悪化してきて、私たち一家は、この鵠沼の伯父のアトリエの近くに疎

開してきた。

　転校した学校は、第三国民学校（現、鵠沼小学校）で、２学期の１年１組だった。

だから、僕は、このおじさんの家で、従兄妹たち（その後、二人の男のいとこは絵描きになり、

その一人は、フランス女性と結婚して、現在、フランスのパリ郊外に住んでいる）とよく絵をか

いた。

　当時の子供の画材はクレヨンか桜パステルだった。戦後、横浜に移って、新制中学校に

入ってからは、主として、水彩画となった。

　横浜のオール中学の展覧会には、毎回、入選して、賞品はいつも水彩絵具か画版だった。残念ながら、これら少年時代の絵は、わけあって、現存してない。

　この“お絵かき”の生活は、高校から退職まで中断してしまった。

ただ、在職中、イギリスやオランダに出張した時は、“時差殺し“のためにパステルで、ホテル窓外の風景画をスケッチした程度だった。

　そして、退職後、この”お絵描き”を再開した。近くの絵画教室に通い水彩画を再開した。そこでは、たまにはヌードがあったが、ほぼ、毎回、モチーフはリンゴと花と壺だった。

　また、横浜朝日カルチャーや横浜美術館の“市民のアトリエ教室”にも定期的に通い、お絵描きに励んだ。

　あるギャラリーが主催するスケッチ会にも参加した。これらの作品は、自宅の各部屋の壁に飾ってあるが、残りの作品は自分の部屋の押入れのスペースを占めている。

　しかし、これらの“お絵描き“は、４年前に、腎臓と心臓の病が発症したために止めざるを得なくなった。

　いまは、週に３日、または４日、朝８時から６～８時間の透析生活だ。たまに鏡の前で「自画像」をスケッチする程度となってしまった。

　ま、仕方がない。年齢とともに、人は病を負い老化もしていく。

好きな美術家はセザンヌで、横浜美術館の２００８年企画のセザンヌ展“Homage to Cezanne”（父と呼ばれる画家への礼賛）開催時に会場で購入した「ポール　セザンヌの画集」（P154 から P184 までの静物画集。ここにはセザンヌの影響を受けた日本の画家、安井曽太郎や岸田劉生のリンゴ絵もある。）がある。

【セザンヌのリンゴの絵に啓発されて描いた静物画シリーズ】

-作品は、全て水彩画　F10 「リンゴの絵」-

私の静物画をタイ、チェンマイに住む友人が購入してくれた。

水彩画　F10 「リンゴの絵」